

第 69 回加藤周一文庫公開講読会「『続・羊の歌』を読む」

——第十八章「AA 作家会議・後半」——

立命館大学博士後期課程

芥川 弘樹

【前半のおさらい】

第二回 AA 作家会議の準備委員会としてタシュケントへ向かう加藤は、団体ではなく個人として、いかなる陣営にも拘束されない「観察者」の立場を選ぶ。カルカッタ空港の逆説とニュー・デリーでの制度の罨は、加藤の「常識」を解体し、それを救うのはインドネシア将校という個人の善意であった。タシュケントでは「ソ連邦を見聞しようという途方もない望みを捨て」、社会主義の周辺を固有の問題をもつ場として観察する方法へ転換する。「田舎の家」の牧歌的な共同生活を経て、加藤はアルジェリア声明に反対し、声明の内容ではなく準備委員会の権限と自らの代表性を論拠として、政治的声明への安易な同調を退けた。

【後半の概略】

「田舎の家」での中国代表との台湾問題をめぐる対話で、加藤は文学者の認識を政治的実践に従属させる論理に抵抗し、台湾撤退声明への反対を、声明の内容ではなく準備委員会の権限と自らの代表性という論拠から示す。情報の遮断された日々を経て、通訳 M との夕暮れの対話に「魂の接触」を見出した加藤は、「会議は魂の接触の場所ではなく、声明の接触の場所にすぎない」と記す。やがて訪れた本会議は空虚なものとして描かれる。帰路に再訪したインドで、加藤は「高貴な顔だちをした」飢えた人間と出会い、東西両陣営の政治言語をとともに「馬鹿げている」と断じ、沈黙のうちに章を閉じる。

【序：歴史的文脈の整理——大東亜会議から AA 作家会議へ】

後半に入る前に、本章を取り巻く歴史的な文脈を整理しておく。

○大東亜会議（1943 年）との連続と断絶

1943 年 11 月、東条英機内閣は東京で大東亜会議を開催した。日本・満洲国・南京国民政府・タイ・フィリピン・ビルマ・自由インド仮政府の代表が集まり、「大東亜共同宣言」を発した。「アジアの解放」と「共栄」を掲げたこの会議は、しかし実質的には日本の戦争遂行と占領支配を正当化する装置であった。

AA 作家会議（1958 年）を大東亜会議と比較するとき、表面的な類似——「アジアの連帯」という標語——の下に、決定的な断絶がある。大東亜会議が日本という一国の覇権の下に「アジア」を統合しようとしたのに対し、AA 作家会議は脱植民地化の文脈において、旧植民地諸国自身が主体となる連帯を志向した。

ここで加藤の立場は微妙である。

加藤は「A・A 作家会議の意味するもの（下）」（『毎日新聞』1958年11月7日）で次のように書く。

日本の作家と植民地主義との関係は、大部分のアジア・アフリカ諸国の作家の場合と逆であり、いわばそれを裏返したものである。我々は国の外から来る植民地主義と相對してきたのではなく、国の内側にある植民地主義と相對してきたのだ。

日本は「アジア」の一員でありながら、かつて「アジア」を支配した側でもある。この二重性が、加藤の「勇ましいことはいわなかった」（『文学』1959年4月）という抑制された姿勢の背景をなしている。大東亜会議の記憶を背負う日本の作家が、AA 連帯の場でいかに振る舞うべきか——この問いが、本章の声明拒否の場面（第8・9段落）に伏在している。

※この点はレジュメ後半の議論と関わるため、各段落の精読において随時参照する。

第9段落前半

またその頃中国は台湾海峡で大陸沿岸の金門島を砲撃していた。準備委員会の中国代表の二人は、どこか超然としていたが、また実に丁重な人々でもあった。私は英語の通訳を通じ、食堂で、二人の中国の作家と台湾の話をした。「台湾はどこの国の領土であると思いますか」と彼らはいった。「むろん中国の一部でしょう」「あなたの考えは正しい。今はそれを米国が占領しているのです」「私は原則として米軍が台湾からひきあげた方がよいと思っています」「その通り。全く賛成です」「しかし、米軍はひきあげないと思いますよ」と私はいい、「そう考えるのは、まちがっています」と彼らはいった。私は、「なぜまちがっているというのか、理由を訊ねてください」と通訳に向って訊いた。通訳は二人の作家としばらく中国語で喋っていたあと、私の方へ向くと、こういった、「それはあなたがまだ人民のなかに入っていないからです」「しかし私は国際情勢の見透しをいっているのですよ」「あなたは労働者農民のなかで働いたことがありますか」「ありませんね」「だからあなたには解らないことがあるのです……」——私には通訳の英語がどの程度に原語の味を伝えているのか、判断することができなかった。しかし通訳の英語に関するかぎり、その言葉は、「私の意見では……」とか「私が思うには……」とかいう表現をほとんど含まず、実に断定的で、簡明なものであった。

・金門島



JJJI.COM (https://www.jiji.com/jc/v4?id=kinmon&p=kinmon_map) より引用 (最終閲覧日: 2026年6月16日)

○同時代的背景——金門島砲撃と中ソ関係

加藤が中国代表と台湾問題を論じていた1958年秋、台湾海峡では現実の軍事的緊張が進行していた。

小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』(岩波書店、1986年)

1958年7月、イラク革命に際してアメリカがレバノンに派兵すると、台湾の蒋介石当局はこれに励まされて金門島から福建沿岸への砲撃を強めた。これに対し中国政府は8月、金門島砲撃を開始した。

同時期、社会主義陣営の内部にも亀裂が生じていた。同書によれば、ソ連はアメリカが中国を攻撃した場合に核兵器と軍事援助を提供すると約束していたが、7月末に北京を訪問したフルシチョフは、中国海軍を「合同司令部」の指揮下に置くのでなければこの約束を履行しないと述べた。同書はこの対立に触れ、「中国の金門砲撃は、ある意味ではこのソ連の態度への応答であった」と記している。

中国代表の「断定的で、簡明」な態度の背後に、孤立を深める中国の強硬な姿勢があったことは、文脈として押さえておく必要がある。

○対話の構造

この前半部は、加藤と中国代表との対話を直接話法で再現する。その構造を整理すると次のようになる。

- 台湾の帰属→合意
- 米国による占領→合意
- 原則としての米軍撤退→合意
- **米軍は撤退しないだろう→ここで対話が断絶する**

三つの合意の後、四つ目の発言で突然「まちがっています」という断定が返ってくる。合意から断絶への転換が、対話の劇的な構造をなしている。

○「原則」と「見透し」の分裂

加藤の発言は、「原則として米軍が台湾からひきあげた方がよいと思っています」と「しかし、米軍はひきあげないと思いますよ」という二文によって構成されている。

これは「当為」と「予測」の区別である。「～すべきである」という規範的判断と、「～であろう」という事実的判断を、加藤は意識的に分離している。中国代表はこの区別を認めない。「まちがっています」という断定は、予測が規範に反するという論理に基づいている。あるいはより正確には、正しい認識をもつ者は正しい未来を予測できるはずだ、という確信に基づいている。

この認識論的差異が、対話の断絶の根本にある。

○「人民のなかに入っていない」という論拠

中国代表の反論——「それはあなたがまだ人民のなかに入っていないからです」「あなたは労働者農民のなかで働いたことがありますか」——は、マルクス主義の認識論における「実践」概念に基づいている。

毛沢東『実践論』（三一書房、1951年5月）（原著1937年7月）

いかなる人といえども、なにかの事物を認識しようとするには、その事物に接触すること、すなわちその事物の環境のなかで生活する（実践する）以外に、解決の方法はない。

毛沢東の「実践論」（1937）において、正しい認識は実践（とりわけ労働者・農民との共同実践）から生まれるとされる。この枠組みにおいては、書齋の知識人の「国際情勢の見透し」は、実践に裏打ちされていない限り「まちがっている」ことになる。

加藤の「ありませんね」という簡潔な応答は、その枠組みへの抵抗ではなく、事実の承認である。しかし加藤はその枠組みそのものを受け入れない。「しかし私は国際情勢の見透しをいっているのですよ」という返答は、実践への参与と情勢分析は別の認識論的次元に属するという主張である。

→ここに「政治と文学」という主題が現れる。中国代表にとって、文学者の認識は政治的

実践に従属する。加藤にとって、情勢分析は実践への参与とは別の認識論的次元に属する。

○通訳の問題

加藤が中国代表とのやり取りで聞いているのは、中国語の発言そのものではなく、通訳を介した英語である。だから加藤は「私には通訳の英語がどの程度に原語の味を伝えているのか、判断することができなかった」と書く。中国代表が実際にどう語ったのかは、加藤には分からない。

それでも加藤は、通訳された英語について一つの観察を記す。その言葉には「私の意見では」「私が思うには」といった主観を示す表現がほとんどなく、断定的で簡明だった、と記されている。つまり発言が、**一個人の意見としてではなく、客観的な真理として提示されていた**、ということである。

この断定的な口調が中国代表本人のものなのか、それとも通訳の問題なのかを、加藤は決めつけない。「通訳の英語に関するかぎり」と限定したうえで、その特徴だけを記録する。第6段落のインド代表の「冗長さ」とは対照的なこの「簡明さ」が、複雑な現実を単純化する方向に働きうることを示す。

第9段落後半

中国代表団は、準備委員会が、台湾からの米軍の即時撤退をもとめる声明を出すことを提案した。私は反対した。理由は、第一に、アルジェリア臨時政府支持の場合と全く同じように、それが準備委員会の役目ではない、ということであった。しかしそれだけではなく、第二にたとえ「代表」の語が何を意味するにしても、東京の作家の圧倒的多数が署名しないだろうことははっきりしている声明書に、私が彼らを「代表」して署名することは、私の個人的意見の如何にかかわらず、できない、ということであった。また第三に、私の個人的意見は、原則として(または究極的に)、米軍の台湾撤退を望むのであって、五八年現在即時撤退をもとめるのではない(もともても全く無駄である)ということであった。私の反対には、他にも有力な賛成者があって、声明は行われなかった。

○論拠の構造

加藤は台湾海峡問題の声明に反対した理由を、三点に整理して示す。この整理の明晰さは、前半の対話の混乱(通訳を介した言葉の不透明性、認識論的断絶)と対照をなしている。

対話においては言葉が届かなかつた加藤が、叙述においては自分の論理を精確に提示する。

第一の論拠(権限)：準備委員会の権限を超える。これは第8段落のアルジェリア問題と同一の論拠であり、一貫性をもつ。

第二の論拠(代表性)：「東京の作家の圧倒的多数が署名しないだろうことははっきりしている声明書に、私が彼らを『代表』して署名することは、私の個人的意見の如何にかかわらず、できない」。

第三の論拠(原則と現実の区別)：「原則として(または究極的に)、米軍の台湾撤退を望

むのであって、五八年現在即時撤退をもとめるのではない（もとめても全く無駄である）」。

○第二の論拠の核心——「私の個人的意見の如何にかかわらず」

・「たとえ「代表」の語が何を意味するにしても、東京の作家の圧倒的多数が署名しないだろうことははっきりしている声明書に、私が彼らを「代表」して署名することは、私の個人的意見の如何にかかわらず、できない。」

→加藤は米軍の台湾撤退を原則として望んでおり、声明の内容には個人として同意できる。それでも署名できないのは、自分が「代表」する東京の作家の圧倒的多数が署名しないであろうことが明らかだからである。

この論拠の核心は、加藤に代表する資格があるかではなく、代表される側の意思にある。加藤個人がどう考えるかは関係がない。代表される当の作家が署名しない以上、その名で署名することは代表という行為の濫用になる。「代表」が括弧に入れられるのは、この語が代表する者の意見ではなく代表される者の意思に拘束されるべきものであることを突き詰めているからだと考えられる。

この姿勢を、加藤は堀田善衛から引き継いだものとして語る。

加藤周一「アジア・アフリカ作家会議から帰って」（『文学』1959年4月）

私が準備委員会で日本の事情に則して行動できたということには、第一に堀田氏の積みかさねがあり……

「堀田氏の積みかさね」とは、堀田が第一回会議の下相談で「勇ましいことをいわなかった」ことを指す。堀田もまた、日本の作家を代表して何を語りうるかという問題に直面していた。堀田は、推薦した団体が「American financed（アメリカから資金提供を受けている）」のではないかと疑われた場面でこう記している。

堀田善衛『インドで考えたこと』（岩波書店、1957年）

日本の芸術家たちの独立をあくまで守らなければならない。

堀田が守ろうとしたのは外国に動かされない作家の自立性、加藤が見据えたのは代表される側の意思に反して「代表」を名乗りえないという制約であり、力点は異なる。それでも両者を貫くのは、日本の作家が国際会議で何を背負い、何を代表して発言できるのかという同じ問いであることを確認できる。

○第三の論拠——「原則」と「現実」の分離

第三の論拠は、前半の対話における加藤の立場を、より明確に言語化したものである。

「原則として（または究極的に）」と「五八年現在即時」の対比は、長期的な規範と短期

的な政策の区別である。そしてその区別を、丸括弧内の「もとめても全く無駄である」という現実認識が支えている。これは冷笑ではなく、効果のない声明を出すことへの拒否である。前半の対話で中国代表が認めなかった「当為」と「予測」の分離が、ここで加藤自身の言葉によって再定式化されている。対話では伝わらなかった論理が、叙述においてようやく展開される。

○第9段落まとめ——対話と叙述の非対称性

この段落全体を通じて際立つのは、対話における言葉の不通と、叙述における論理の明晰さの対比である。

食堂での対話において、加藤の言葉は中国代表に届かなかった。認識論的な前提が異なるため、同じ英語を使いながら両者は理解し合えなかった。しかし叙述において、加藤は自分の論拠を三点に整理し、精確に示す。

この非対称性は、自伝(小説)というジャンルの特性でもある。対話はその場で完結するが、叙述は時間をかけて論理を整理できる。加藤が食堂での対話では言えなかったこと——あるいは言ったが伝わらなかったこと——を、『続羊の歌』という自伝(小説)の中で、ようやく展開している。その意味で、この段落は過去の出来事の記録であると同時に、過去の自分への遡及的な論理化でもある。

第10段落

私はウズベック共和国について、できるだけ多くのことを知りたいと思っていた。彼らが中央アジアの荒野に農場をつくり、工業を興し、文盲と伝染病と飢餓を克服したのは、ほとんど奇蹟にちかいほどの大事業である。私はその大事業の過程、殊にいわゆる「スターリン批判」以来の新政策が、そこにどう現れてきたかを、知りたいと思ったが、それは必ずしも容易な仕事ではなかった。集団農場では大宴会が私たちを待っていた。宴会は、質問を鋭くして、相手から正確な答をひき出すのに、必ずしも適当な機会ではない。経済統計はロシア語で、その項目を理解するのにも、私は辞書をひいて長い時間をかけなければならなかった。私はまた滞在が長びくにつれて、いくらか世界の出来ごとも知りたいと思うようになった。カメルーンの青年と私は、ロシア語の新聞を読むことができないから、英仏語の新聞をとってもらいたいという希望を表明した。日刊の《ル・モンド》と週刊の《ニュー・ステイツマン》。「モスクワに連絡してみましよう」という返事で、私たちはしばらく待った。しかし実際に到着したのは、英仏の共産党機関紙だけであり、遂に、たとえば中国が、沿岸の島を現在どの程度に砲撃しているのか、していないのか、知ることができなかった。

○文章の構造

この段落は、二つの「知りたい」という欲求とその挫折によって構成されている。

第一の「知りたい」——ウズベック共和国の実情、とりわけスターリン批判以降の新政策

がどう現れているか。これは宴会と言語の壁によって阻まれる。

第二の「知りたい」——世界の出来事、具体的には《ル・モンド》と《ニュー・ステイツマン》。これは共産党機関紙の到着によって代替され、結果として台湾海峡の状況すら知ることができなかった。

二つの挫折が並置されることで、「田舎の家」という空間が、外部世界から二重に遮断された場所として浮かび上がる。

・「スターリン批判」

→フルシチョフによるスターリン批判（1956年）は、社会主義体制の自己修正の試みであり、その後の「新政策」がウズベックにどう現れているかは、社会主義の現在を測る重要な指標である。加藤が知りたかったのは、社会主義の外形ではなく、その内部の変化であった。

・《ル・モンド》

フランスの新聞。パリ発行の夕刊紙。一九四四年創刊。知識層に影響力をもつ中立紙。週刊英語版も発行。（『日本国語大辞典』より引用）

・《ニュー・ステイツマン》

イギリスの評論週刊紙。1913年バーナード・ショーら進歩的な知識人の協力で創刊されて以来、社会主義的な見地から政治、文学、美術を対象に編集されている。新聞として登録されているが、全60ページで雑誌的性格が強い。署名原稿が中心である。31年『ネーション』Nation紙と合併して『ニュー・ステイツマン・アンド・ネーション』となったが、57年元の名に戻った。発行部数2万6000部（1986）。対抗紙に保守的な『スペクテーター』The Spectatorがある。（『日本大百科全書』より引用）

○情報統制の具体

要求した《ル・モンド》《ニュー・ステイツマン》の代わりに、英仏の共産党機関紙のみが届いた。「モスクワに連絡してみましょう」という返答は、「田舎の家」が中央の管理下にある空間であることを示す。加藤は批判的な形容詞を用いず、事実の記述のみによってその性格を示す。

第11段落

しかし私は田舎暮らしに退屈していたわけではない。午前の会議があり、午後の見物があり、また資料があり、話し相手があり、また時には土地の新聞記者やモスクワ放送の特派員が会見を申し込んで来ることもあった。また劇作家シーモノフ氏はタシュケントに泊っていて、時々「田舎の家」に現れた。夜は階下の広間で、活動写真を映し、私はそこで「白

痴」や「静かなるドン」を見た。M は私の傍に腰かけて、科白の要点を英語で耳もとに囁いてくれた。「どう思いましたか」「素晴らしいと思う」「これは素晴らしいと私も思います。ここまで来るのに、どれほど長くかかったか、もしあなたが知っていたら！」と彼女は呟いた。私はロシア語を覚えたいと思っていたが、そのための時間をつくり出すのもむずかしいほど、忙しかった、いや、その田舎暮らしには楽しみが多すぎたというべきだろう。

○文章の構造

この段落は、「しかし」という逆接で始まる。

第 10 段落が情報遮断と観察の困難を描いていたのに対し、ここでは「退屈していたわけではない」という否定によって、同じ「田舎の家」の別の側面が示される。しかし単純な反転ではない。段落の末尾で「忙しかった、いや、楽しみが多すぎたというべきだろう」と自己修正することで、「田舎暮らし」の時間の質が、より正確に言語化される。

○コンスタンチン・シーモノフ

ソ連の小説家、劇作家、詩人。解放された人間のヒューマニズムが作品中に美しく融合し、簡潔で力強いスタイルで描かれている。戯曲「ロシアの人々」、小説「昼となく夜となく」など。前後六回にわたりスターリン賞を受賞。(一九一五～七九) (『日本国語大辞典』より引用)

○映画の場面——「白痴」と「静かなるドン」

「白痴」はドストエフスキーの原作に基づくイワン・ピリエフ監督の映画(1958年)、「静かなるドン」はショーロホフの原作に基づくセルゲイ・ゲラシモフ監督の映画(1957年)である。いずれもロシア文学を映像化したソ連映画である。

→M が「科白の要点を英語で耳もとに囁いてくれた」という行為は、言語の壁を越える媒介であると同時に、親密な行為でもある。M の言葉「ここまで来るのに、どれほど長くかかったか、もしあなたが知っていたら！」は、加藤が知りえないソ連社会の内側の歴史への言及である。

第 12 段落前半

「田舎の家」のまえには、ポプラ並木がひとすじ長く野の中に通じ、その梢の先は夕暮の青磁色の空の奥へ、はるかに高くのぼっていた。夕食の後で、M や「蛙」とその並木道を散歩することを私は好んだ。「ああ、また一日が終わった」と M はいった。「まだ終らないじゃありませんか」。「蛙」は大柄で、お洒落で、陽気な娘だった。「おまえは馬鹿である」と M はフランス語で応じ、英語でつぶけた、「世の中に終りのないものはありません。のどかで美しい日々……この田舎の家の生活も、いつか終って、モスクワへ帰る。こういうことを感じたことはありませんか。あまり美しいものを見ていると、それが急に終るような気がする、私の感じ方がおかしいのかもしれないけれど」。並木道から私たちは野原の

なかの小径へ折れる。そこには小川があり、思いがけぬところに小さな橋があり、灌木の茂みや芝生や果樹園の崩れかけた垣根があり、頭上に澄みきった広い空があった。「ここが私の好きな場所です」と M はいった。その野原をわたる微風は、私に信州浅間山麓の夏の夕暮を思い出させた。私は M の好きだという場所を、この上もなく好んだ。

○空間描写の詩的構造

「ひとすじ長く野の中に通じ、その梢の先は夕暮の青磁色の空の奥へ、はるかに高くのぼっていた」

→水平（並木道が野へ続く）と垂直（梢が空へのぼる）という二つの方向が重なる。「青磁色」という色彩の選択は、中国の磁器を連想させる語であり、中央アジアという場所の文化的重層性とも共鳴する。

この空間は、会議場とも「田舎の家」の室内とも異なる、第三の場所として機能している。制度的空間（会議場）でも私的空間（各自の部屋）でもなく、開かれた自然の中の、しかし親密な場所として描かれている。

○M の言葉——終わりの予感

「ああ、また一日が終わった」という M の言葉から、この段落の核心となる対話が始まる。「蛙」の「まだ終らないじゃありませんか」という明るい反論に対し、M はフランス語で「おまえは馬鹿である」と応じ、英語で続ける。

ここで言語が切り替わる。親しみのある軽口はフランス語で、内省的な言葉は英語で語られる。M にとって英語は母語ではなく職業上の言語である。その英語で「世の中に終りのないものはありません」と語ることに、感情からあえて距離を置こうとする身振りが感じられる。

「あまり美しいものを見てみると、それが急に終るような気がする」——美しさと喪失の予感が同時に訪れるこの感受性に、M は「私の感じ方がおかしいのかもしれないけれど」と付け加える。

○場所の移動と二人の共鳴

並木道から野原の小径へという移動は、対話の深まりと対応している。「思いがけぬところに小さな橋があり」という描写は、この空間が地図に載らない、偶然に出会われた場所であることを示す。

そして「その野原をわたる微風は、私に信州浅間山麓の夏の夕暮を思い出させた」という一文で、タシュケントの野原が加藤の日本の記憶を呼び起こす。

▶この「信州浅間山麓」は、加藤にとって特別な意味をもつ場所である。『羊の歌』の「高原牧歌」（岩波新書、1968年。初出『朝日ジャーナル』1967年2月5日号）で、加藤

は中学最後の夏から十年以上にわたり追分村で過ごした夏を回想している。そこは妹と二人きりで暮らした場所であり、加藤は妹について「私と妹はよい友だちのようで、お互いに争うということが一度もなかった」「なぜ私が出かけたがるのかをよく知っていたし、私は彼女が知っているということを知っていた」と書く。説明を必要としない理解、言葉に出さずとも通じ合う関係——それが追分の夏の核心であった。

▶タシュケントの野原がこの記憶を呼び起こす→M との関係が、追分での妹との「説明のいらぬ」共鳴と同質のものであると言える。だからこそ、この一文は後半の「以心伝心」への伏線として機能する。

▶さらに「高原牧歌」の追分は、夏の終わりとともに最も美しくなる場所でもあった。「さようなら、あまりに短かかりしわれらが夏のきらめきよ」という句を加藤は思い出し、「夏のまさに終ろうとするときに、高原はもっとも微妙なものにみちていた」と書く。終わりの予感のなかで美しさが極まるというこの感受性は、第 12 段落前半で M が語った「あまり美しいものを見ていると、それが急に終るような気がする」という言葉と、深いところで重なっている。

そして「ここが私の好きな場所です」と M が言い、「私は M の好きだという場所を、この上もなく好んだ」と加藤が応じる。二人が同じ場所を好むという事実が、理由を説明されないまま示される。この「説明のなさ」こそ、追分で妹と分かち合ったものであり、後半の「なぜ殊にその場所を好んだかを説明することはできない」へとつながっていく。

第 12 段落後半

なぜ殊にその場所を好んだかを説明することはできない。それはほとんど「以心伝心」というものにちかかったのかもしれない。彼女は敏感であったばかりでなく、聡明であったから、私は嘘をいう必要がなかったし、たとえいっても、彼女は言下にそれを見抜いたことであろう。「蛙」は陽気に何かの歌の節をくちずさんでいた。私たちはいくさや、古代エジプトの彫刻や、日本人の心や、いつまでも続く会議や、役人や、社会主義や、その他ありとあらゆることについて話した。そこには一ヵ月の間毎日話していてもつきない話題があった。その間彼女の言葉のたった一言でも、私にとって理解し難いものはなかった。もちろん私は彼女からソ連邦の社会について実に多くを学んだ。しかしそういうことは別に、地上のどこでも、また生涯のどの時期をとってみても、ひとりの人間に出会い、それほどまでに相手の感じていることを感じ、相手の考えていることを考えるような機会は、実に稀でしかないだろう。そのことを私ははっきりと感じ、作家会議がはじまると共に——会議は魂の接触の場所ではなく、声明の接触の場所にすぎない——「田舎の家」の生活は終り、再び彼女と夕暮の散歩をたのしむ機会はないだろうということを、はっきりと感じていた。私は彼女が唱ったのを聞いたことがない。しかし彼女が私に教えるため

にロシア語で「これは何といいますか」という文句をくり返したとき、私にはそれが限りなくやわらかく、優しく、いいようもなく甘美に聞えた。

○「嘘をいう必要がなかった」

「彼女は敏感であったばかりでなく、聡明であったから、私は嘘をいう必要がなかったし、たとえいっても、彼女は言下にそれを見抜いたことであろう」

「嘘をいう必要がなかった」とは、社交的な儀礼や外交的な言葉、政治的な配慮から解放されていたということである。本章で描かれてきた言葉は、その多くが何かに隔てられていた。第6段落のインド代表の演説は「何を食べるか」という目的にすら届かず、第9段落の中国代表との対話は認識論的な前提の違いゆえに断絶した。会議という制度的空間において、言葉は迂回と遮断に満ちていた。

Mとの対話においてのみ、加藤は言葉をまっすぐに発することができた。その条件として加藤が挙げるのは、Mの「敏感」さと「聡明」さである。嘘が不要だったのは、嘘をついてもただちに見抜かれるほど、相手が鋭い認識力をもっていたからだ。「言下にそれを見抜いたことであろう」という確信は、相手の知性への全き信頼の表明にほかならない。会議の場で言葉を阻んでいた壁が、ここではMの聡明さによって消えている。

○「会議は魂の接触の場所ではなく、声明の接触の場所にすぎない」

この一文が本章全体の主題を凝縮している。「魂の接触」(Mとの対話)と「声明の接触」(会議)の対比は、政治と文学、制度と個人という本章を貫く対比の最終的な定式化である。

ここで「政治と文学」という主題に立ち返ることができる。中国代表が文学者の認識を政治的实践に従属させたのに対し、加藤はMとの「魂の接触」を、いかなる政治的言語にも回収されない次元として擁護する。加藤にとって文学とは、声明ではなく魂の接触の場所である。これは戦後日本の「政治と文学」論争における、文学の自律性を擁護する立場と通じている。

第13段落

そうして会議がやって来た。新築の大きな宿屋に、多勢の人が集り、多くの言葉が溢れ、多くの演説が、行われ、舞台裏では議事の進行について長い相談があった。それから会議が終り、人々が散り、私はMの夫君で会議にも途中から出て来ていたS氏と共に——ということは、つまりS氏の案内に従って、コーカサス山中の古都トゥビリッスを訪ね、そこからモスクワへ飛び、レニングラードへ往復した。十一月はじめのレニングラードとネヴァの河畔には、吹雪が舞っていた。

○「そうして会議がやって来た」

「そうして」という接続詞が示すのは、「田舎の家」の生活の後に会議が来た、という時間的継起である。しかし同時に、この接続詞には諦念に近い響きがある。

「会議がやって来た」という表現も注意を要する。加藤が会議へ向かったのではなく、会議が「やって来た」。主体は加藤ではなく会議である。この受動的な構文は、会議の到来が、加藤にとって外部から課された出来事であったことを示唆している。第12段落で「作家会議が始まると共に、『田舎の家』の生活は終り」と書かれていたことと対応している。会議は、豊かな時間を終わらせるものとして到来した。

・「新築の大きな宿屋に、多勢の人が集り、多くの言葉が溢れ、多くの演説が、行われ、舞台裏では議事の進行について長い相談があった」

「多勢」「多くの言葉」「多くの演説」「長い相談」といったように数量的な形容詞が並ぶが、具体的な内容は何も示されない。

これは加藤の叙述の意図的な選択である。準備委員会の一ヶ月が、詳細な対話・具体的な問題・個人の名前とともに描かれたのとは対照的に、本会議は「多くの言葉」という抽象的な表現に圧縮される。「声明の接触の場所にすぎない」という第12段落の認識が、ここで叙述の形式として実現している。

○トウビリッシ (トビリシ)

ジョージア (グルジア) の首都。人口110万3500 (2002)。カフカス山脈南麓 (なんろく) の広い裾野 (すその) と、裾野を刻んで南流するクラ川河谷の標高500メートル前後の地に市街が広がる。名称はジョージア語の「ぬるい水」の意で、クラ河谷の温泉湧出 (ゆうしゅつ) によると伝えられる。旧称チフリス Т и ф л и с / Tiflis。ザカフカス鉄道に沿い、支線を分岐し、カフカス山脈を越えるジョージア軍用道路の南の終点にあたる交通の要衝。古来、金属工芸、武具などの工房が集まっていたが、現在ではジョージア最大の工業集積地である。工作機械、電気機器、無線機、航空機、自動車 (おもに貨物用)、電気機関車、農業機械などの工場がある。伝統工業、食品工業も盛んで、織物、皮革、ぶどう酒とブランデー (多くを輸出)、たばこ、陶磁器、金属工芸品などがある。1966年地下鉄が開通し、坂の多い街路とムタツミンダ丘にはケーブルカーがある。ジョージアの学芸・文化の中心地で、科学アカデミー、総合大学、高等教育機関、ジョージア民族美術館、劇場など多数の文化施設が置かれている。[渡辺一夫] (『日本大百科全書』より引用)

○レニングラード

サンクトペテルブルクの旧称。一九二四年にレーニンを記念して改称され、九一年まで用いられたが再びサンクトペテルブルクに戻された。(『日本国語大辞典』より引用)

○ネヴァの河畔

《Neva / Н е в а》ロシア連邦北西部の川。ラドガ湖を源とし、サンクトペテルブルグを貫流して、バルト海に注ぐ。長さ74キロ。

第 14 段落

タシュケントの青空とポプラ並木は、もはや無限に遠い夢のようであった。あの「田舎の家」に、私は数年を過したのか、ただ数日を過したのか。そこに流れていた時間を測る尺度は、もはやなかった。

○「もはや」の二度の使用

「もはや無限に遠い夢のようであった」「そこに流れていた時間を測る尺度は、もはやなかった」

「もはや」が二度繰り返される。かつてあったものが今はない、という断絶を示す副詞である。タシュケントの青空とポプラ並木は、ただ遠いのではなく「無限に遠い」。尺度は失われたのではなく、はじめから「なかった」。レニングラードと「田舎の家」の間には、わずか数週間の物理的距離を超えた断絶がある。

○「数年を過したのか、ただ数日を過したのか」

「田舎の家」での滞在は約一ヶ月であった。この問いが示すのは、時間の長さで経験の密度が一致しないということである。一ヶ月は、数年分の密度をもちながら、数日のように過ぎ去った。第 5 段落の「慌てず急がず、のどかに牧歌的な生活を娛しんだ」時間は、もはや時計では測れない時間として回顧されている。

第 15 段落

その年の暮に、私はそのまま東京へは帰らず、降誕祭をウィーンで過した。それからユーゴスラヴィアを見物し、ギリシャを通り、インドへ行った。タシュケントへの往路にインドを通ったときに、私は役人と接触したにすぎない。帰路には、AA 作家会議で識ったインド人を訪ね、いわばその国を内側から一瞥することができた。その印象は強烈を極め、それまでヨーロッパと日本とから成っていた私の世界に、全く異質の第三の要素を加えた（北米の現状を私が実地に見たのはもっと後になってからである）。いわゆる低開発地域の問題で、インドに劇的にあらわれていないものはほとんどなく、インドの含む問題で、低開発地域一般に通じないものはほとんどないだろう。爆発的な人口の増加、農業生産の停滞、大衆の貧困と文盲、教育された少数者の大衆からの遊離、先進国への経済的な依存、自国の過去への文化的な依存、地域的な割拠主義、共通の言語の不在、名目的な議会民主主義……しかしなによりも、大衆の生存を脅かす飢餓、繁華街の路傍にも、役所の玄関にも、遠い山中の村にも、ありとあらゆるところにまさに圧倒的に遍在する「貧困」は、後日私が「低開発国」あるいは「第三地域」あるいは「アジア・アフリカ・中南米」という言葉をきく度に必ず想いうかべたものである。痩せ細って骨と皮ばかりになったインド人は、高貴な顔だちをしていた。飢えた人間に向って、抽象的な「自由」を説くことは、馬鹿げている。たとえ飢えていても人間に向って、「パン」を投げあたえさえすれば満足するだろうと考えるのは、それ以上に馬鹿げている。……

○往路と帰路のインド

「ヴィーンで過した。それからユーゴスラヴィアを見物し、ギリシャを通り、インドへ行った」

→ユーゴスラヴィア（クロアチア）は「社会主義圏の周辺」、インド（ケララ）は「非社会主義国における地方共産党政権」——加藤が当初設定した比較考察の枠組みが、ここで完結に向かう。

往路のインド体験を、加藤は「役人と接触したにすぎない」と要約する。第2段落で詳細に描かれたカルカッタ空港の問答が、一句に圧縮される。制度と摩擦したが、人間とは出会わなかった——それが往路であった。これに対し帰路は「AA 作家会議で識ったインド人を訪ね、いわばその国を内側から一瞥することができた」。制度的人間（役人）と個人（識ったインド人）という、本章を貫く対比の最終形である。

「第三の要素」

「それまでヨーロッパと日本とから成っていた私の世界に、全く異質の第三の要素を加えた」

ヨーロッパと日本という二項で構成されてきた加藤の世界認識を、インドがその二項に収まらない「異質」なものとして根本から変える。

丸括弧書きの「北米の現状を私が実地に見たのはもっと後になってからである」は、この時点での加藤の認識の限界を正直に示す。第三の要素がインドであったのは、北米をまだ知らなかったからでもある、という自己相対化である。

○問題の列挙と「貧困」

「爆発的な人口の増加、農業生産の停滞、大衆の貧困と文盲……」という低開発地域の問題の列挙は、「……」という省略記号で終わる。列挙しきれないほど問題が多いことを示すと同時に、社会科学的な分析の言語が、最後に置かれた「貧困」の現実の前で力を失うことを示してもいる。ここで「貧困」が括弧に入れられるのは、それを概念として相対化するためではない。むしろ逆に、列挙された抽象的な問題群から「貧困」を切り離し、「圧倒的に遍在する」具体的な現実として際立たせるためである。

○「痩せ細って骨と皮ばかりになったインド人は、高貴な顔だちをしていた」

前半の社会科学的な列挙から、この一文への転換は劇的である。数量的な分析言語が消え、一人の人間の顔が現れる。「骨と皮ばかり」という極限の身体と「高貴な顔だち」という描写が並置されるとき、そこに現れるのは、飢えた人間を「哀れな」存在へと一括りにする視線では捉えられない、一個の具体的な顔である。この顔の具体性が、続く二つの否定の前提となる。飢えた人間を「自由」を求める主体としてのみ、あるいは「パン」で満たされる肉体としてのみ見る——そうした単純化を、この顔は拒んでいる。

○章の終わりとして

本章は、カルカッタ空港の「通過することは、インドに入ることを意味する」という役人の言葉に始まり、二重の否定と「……」という沈黙で終わる。往路で「常識」の解体を経験した加藤は、帰路で政治的言語の解体を経験する。両者に共通するのは、自明と思われたものが自明でなくなる認識論的転換であり、どちらも具体的な人間との出会いによって引き起こされる。観察者としての加藤が最後に見るのは「高貴な顔だちをした」一人のインド人の顔である。その顔は、AA 連帯の理念でも冷戦の政治言語でも捉えきれない。「……」は、その顔がいかなる政治的言語にも回収されないという加藤の認識を、沈黙のかたちで示している。

○野間宏との比較——「政治と文学」をめぐる

同じ会議に参加した野間宏との差異を、両者のテキストによって確認する。

野間宏「第二回アジア・アフリカ作家会議の報告」（『新日本文学』1959年2月）は、会議を肯定的に記録する。野間が紹介するカメルーン代表マチップの演説は、会議の精神を端的に示す。

アフリカの作家は植民地主義の解毒剤を処方する医者のようなものであり、同時に民族独立のためにたたかう一人の兵士でもあるのだ。

加藤はこの「作家は兵士でもある」という連帯の言語から距離を取る。

私は準備委員会で勇ましいことはいわなかった。日本の事情がそういうものではなかったからである。（「アジア・アフリカ作家会議から帰って」『文学』1959年4月）

日本の作家と植民地主義との関係は、大部分のアジア・アフリカ諸国の作家の場合と逆であり、いわばそれを裏返したものである。我々は国の外から来る植民地主義と相対してきたのではなく、国の内側にある植民地主義と相対してきたのだ。（「A・A 作家会議の意味するもの（下）」『毎日新聞』1958年11月7日）

マチップにとって作家は外来の支配者と「たたかう一人の兵士」でありうる。しかし日本の作家が向き合うのは「国の内側にある植民地主義」であり、日本はかつて「アジア」を支配した側でもある。この立場の違いが「勇ましいことはいわなかった」という抑制を支えている。

差異は会議の描き方にも現れる。野間が日程・演説・決議を克明に記録するのに対し、加藤は本会議を「多勢の人が集り、多くの言葉が溢れ、多くの演説が、行われ」（第13段落）と数語で済ませる。その理由は「会議は魂の接触の場所ではなく、声明の接触の場所にすぎない」（第12段落）という一文に示されている。

野間が会議を文学と政治の結合の達成として記録したのに対し、加藤はそれを「声明の接触の場所」として相対化し、外部の個人的経験にこそ意味を見出した。新日本文学会に属し文学と政治の結合を志向した野間と、文学を「魂の接触の場所」とした加藤——この差異は「政治と文学」という主題における両者の立場の違いに対応する。